

もっと知ろう “陶” 35 方言昔話(7) 天狗岩

昔むかしの話のだがのー、水上村外山の中腹にでっかあ岩穴があつてのー、そこに鼻が高あて口がへの字のどーらーこわー顔した天狗様がおらつせたと。

そん頃の水上村はのー、田代山に住んどる悪ー鬼んたあによお襲われてのー、とうきびやなすびやらをてれこけ盗られたり、女子供を連れ去られたり荒けなあことされとったげな。村の衆はおおじょこいとったが、鉄棒を振り廻す鬼んたあにどうもできへんかった。

ある日の朝、天狗が外山の岩の上からひどろお朝日を眺めながら周囲を見渡すがさあと、鬼んたあが小里川へすんでのところまで来よおるのが見えた。



天狗は、「よ〜し今日こそは二度と水上部落を襲わんようにこらしめてやる」と、ちやつと外山のでっぺんまで登り、そこからひとつ飛び、下久手の岩の上まで跳んだ。

実は、天狗は鬼んたあのやってくる小里川からの崖の上にだ一

ぶ前から団子の形をした、たあもなあ大きな丸い石をぎょうさん積んで鬼退治のまわしをしておいたのだ。

鬼んたあは、小里川の崖を登りよーる途中、そーつと外山の方を見ると、そこに天狗の姿が見えんと喜んだ。とろー鬼んたあは天狗が待ち伏せしているとは考えんかったんや。

鬼んたあが、えらーめをしてやつとがさあと登りきるといふ時、上の方から丸いでっかあ団子の石が転げ落ちてきた。いっちゃん先の赤鬼の角に当たり、折れた角が下の方に転げ落ちていった。更にどえらあ数の団子をごろごろ転げ落ちてきた。

うろこいた鬼んたあは、太一木の影に隠れたり、狭あ岩陰に身を潜めたりしとったが、何匹かが岩の下敷きになって呻いている。そのうちにきつそうな一匹の青鬼がどうにか急斜面の上まで登って見ると、天狗が岩を軽々と持ち上げて鬼んたあをめがけて投げている。

これを見た青鬼は益々青くなって「うわー！天狗や。天狗が団子の岩を投げよおる。」天狗と聞いては、「こりやあかん。」と団子の岩にやられたものをその場において、わやこいで我先にと先を争って川に落ちてビタビタになって逃げ帰っていった。

天狗は一つの団子岩だけ残して全部がのおなるまで投げちまった。

(残ったこの岩は東濃カントリー倶楽部の6番ホール横に今もあります。)

これ以来、鬼たちは天狗のいる水上村を襲うのがとろくさあなって二度と現れなかつたそうや。そんで村人は怖い顔の天狗だけど親しみをこめて天狗様と呼ぶんだで。

3年にわたつての『もっと知ろう “陶”』のご愛読ありがとうございました。今回を最終回とさせていただきます。